



## 拾ヶ堰物語

とどろきまごいちろう  
等々力孫一郎らの拾ヶ堰づくり

「このままでは、おれたちのくらしはつらくなる一方だ。」

「水さえあれば、米ができるのになあ。」

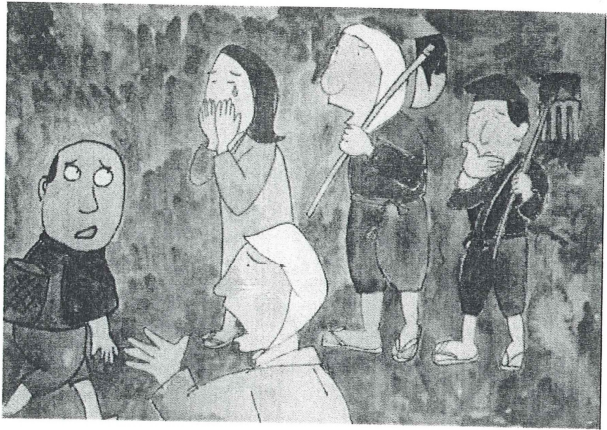
「水さえあれば、豊かなくらしができるのになあ。」

「水さえあれば……。」



# 拾ヶ堰物語



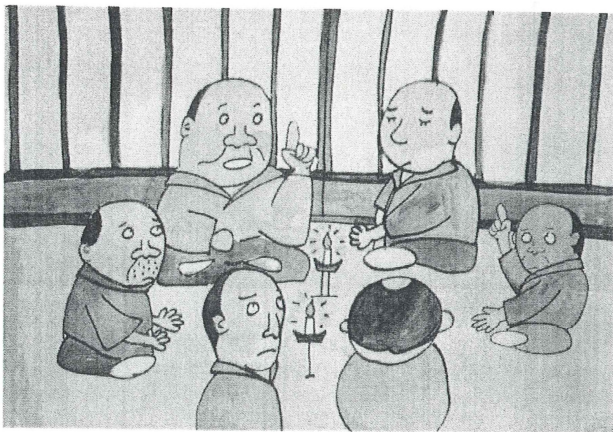


農民たちはなげきました。

「なんとかして、どこから水を引いてこれないものか。」  
「だが水を引くなんてむりだ。いったいどこからどうやって水をひくのだ？」

近くに大きな川が流れていない、水がすぐ地下にしみこんでしまふといった、土地の条件じょうけんがよくないこの安曇野あづみの一帯いったいに水を引くということは、農民たちにとって想像そうぞうもつかない、夢ゆめのまた夢ゆめの話わだったのです。



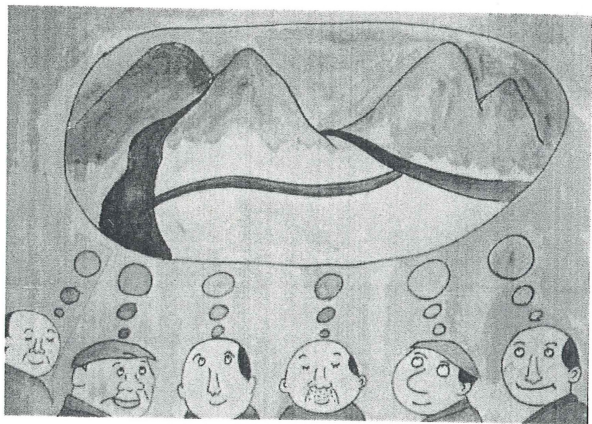


二

そんなとき、柏原村の庄屋、等々力孫一郎は、苦しんでいる農民たちの姿を見て、なんとかして水を引いて安曇野に田んぼを増やし、農民たちの生活を豊かにしてやりたいと考えるようになりました。その考えに賛成し、堰をつくろうと協力したのが、孫一郎と同じ柏原村出身の中島輪兵衛、前の年に勘左衛門堰という堰の工事をすすめた、堀金村の平倉六郎右衛門、ほかに関与一右衛門、白澤民右衛門、岡村勘兵衛といった人たちでした。

彼らはまず、どこから水を引こうかと考え、今の松本市を流れる奈良井川から水を引こうと決めました。なぜかという、奈良井川は水の量が豊富で、安曇野一帯をうるおすことができると思えたためです。



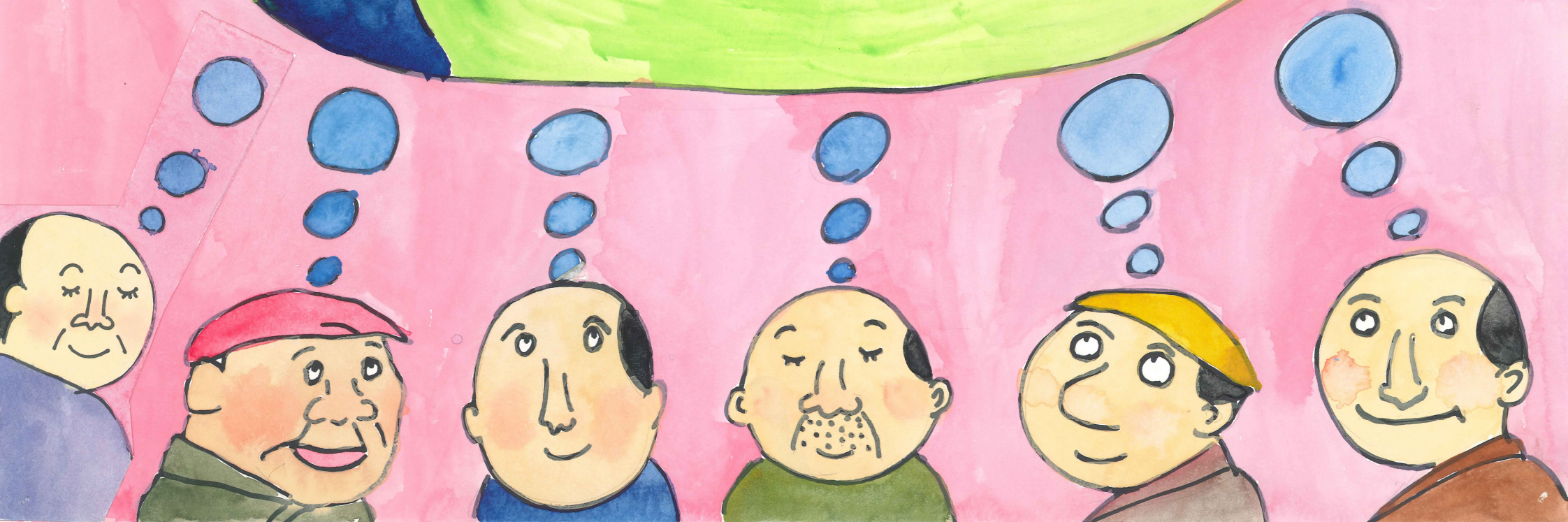


三

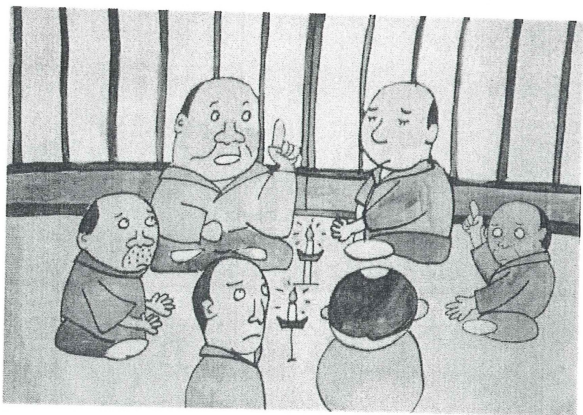
そして次は、奈良井川からどこを通って流せば安曇野一帯まで流れるようになるか、コースを考えました。実際に外に出て歩いたり、東の山の養老坂や、三郷村の室山に登って見たりしながら、彼らが決めたのは、奈良井川から出発して、今の豊科町、三郷村、そして堀金村、最後は穂高町を通って烏川に合流するというコースです。これが「拾ヶ堰」の始まりです。

コースが決まり、いよいよ測量や設計が行われるようになりました。

この時代に水路などを作るためには、お殿様が命令して農民に作らせていたのですが、拾ヶ堰は、農民から出た計画で、このことから当時の人々がいかに水を大切にしていたかがわかります。また、それまでの多くの水路は、高いところから低いところに流す、堰（縦堰）だったのですが。拾ヶ堰は、同じくらしい高さの所を流す堰（横堰）で、これには高度な土木技術が必要とされました。







四

人々の夢をのせた捨ヶ堰ですが、奈良井川から水を引くということはかんたんなものではありませんでした。

「六郎右衛門さん、いくら水の量は豊富といつても、奈良井川からわしらの村までは遠い。村まで水は流れてくるだろうか。」  
と、輪兵衛たちはたずねました。

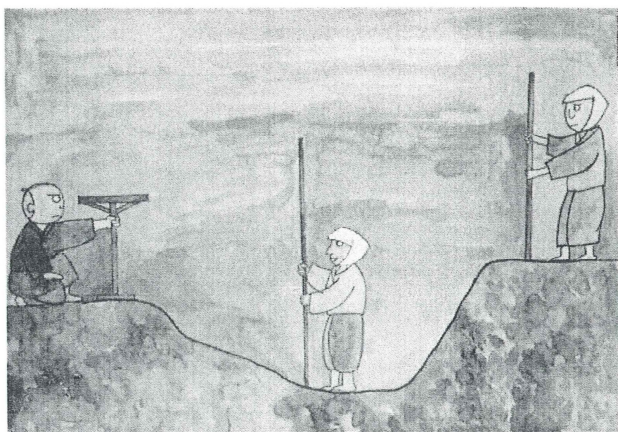
「水というものは、いきおいがあれば、平らなところでも流れるものです。奈良井川から村まで、同じくらいの高さの道すじを見つければ、そこに堰をつくれればよいのです。」  
と、六郎右衛門は答えました。

「そうか、同じ高さを見つけるのか。」

輪兵衛たちは土地の調査を始めました。

ところが、家や畑がつぶされると考え、堰をつくるのに反対する人がいたり、ほかの村との水あらそいが起きる心配もあったため、彼らは、きのこがりや、つりに行くふりをして、だれにも気づかれないように土地を調べなければなりませんでした。そしてようやく水を引く道すじを見つけたのです。





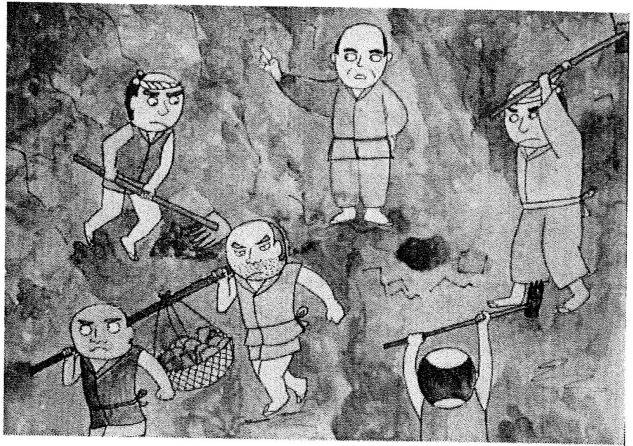
## 五

こうして堰が引けそうだとわかると、松本藩もこの計画を許可し、藩の役人も協力しながら、本格的な測量が始まりました。手作りの測量器、棒やちようちんなどを使って、土地の高い、低いをはかっていきました。十五キロもの長さを、たった九人、十八日間で測量したのです。

この測量をもとにして、その年のうちに、堰の設計図と工事の計画書ができあがりました。

輪兵衛たちの作った設計図と工事計画は、たいへんしっかりしたものだだったので、松本藩は工事に必要なお金を半分貸して、拾ヶ堰の水を使わない村からも、必要な人手を出させました。





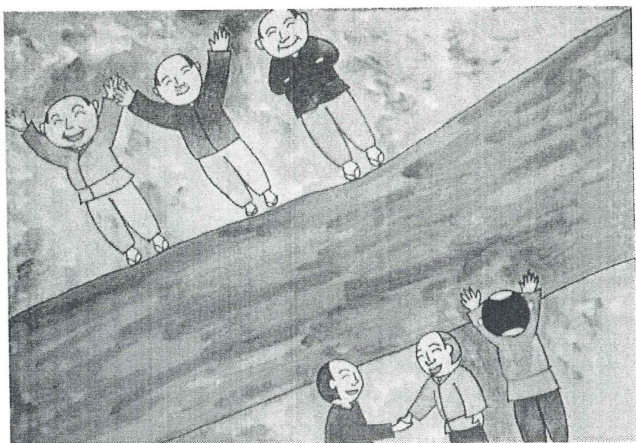
## 六

一八一六年二月、いよいよ本格的な工事が始まりました。一日二千人もの人が働きました。二月という真冬、身のこごえるような寒さの中、たきびをして固くなった土をやわらかくしながら掘っていきました。

工事をすすめるなかで、困難な問題がいくつもありました。まず、奈良井川の取り入れ口ふきんでは、高いがけを切りくずさなければなりませんでした。梓川では、この大きな川を横切らなければなりませんでした。ここでは川幅を一、二メートルほり下げ、そこに堰を通しました。また、安曇野にはたくさん用水路が通っており、その上を三十六ヶ所も交差しなければなりませんでした。輪兵衛たちは、木の箱でトンネルをつくり、もとからある用水路は、その中を通しました。

また、ほとんど水平に同じ高さを保つには、正確に測量する必要がある、工事の途中で水を通してみて、水がきちんと流れるかどうか確かめながら、すすめていきました。





七

三ヶ月後。こうしてたくさんくろらうの苦勞くろらうや工夫くふうをかさね、とうとう拾ヶ堰は完成かんせいしました。幅はば約十メートル、長さ十五キロメートルという大規模だいきぼな工事をたった三ヶ月で終わらせたことは、とても驚異きょうい的なことだったといえるでしょう。

「やったあ！これでおれたちの村にも田んぼができるぞ。」

「たくさん米を作ることができるぞ。」  
「ばんざーい！」

この堰は、吉野村・新田町村・成相町村（現豊科町）、矢原村・等々力村・柏原村・穂高町村・穂高村（現穂高町）、上堀金村・下堀金村（現堀金村）

の十ヶ村をうるおしたことから、「拾ヶ堰」と名づけられました。

江戸時代最大の土木工事である拾ヶ堰、この工事があつたおかげで、今の米どころ安曇野があるのです。

作られた当時三百ヘクタールだった水田が、大正時代は六百ヘクタールになり、現在では千ヘクタールにも増えたのです。

田んぼを作りたいという人々の思いが、ようやくかなって作られた拾ヶ堰。当時の思いはその後も受けつがれ、「ジツカ」と親しまれながら、今も安曇野をうるおしています。

